

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

8 フランスで活躍する日本人建築家（2020年11月2日）

建築界における日仏交流は、1920年代後半の昭和初期に前川国男と坂倉準三がル・コルビュジェに弟子入りしたことから始まると言われています。前川国男は、上野の東京文化会館や東京都美術館を設計した建築家です。坂倉準三は、1937年パリ万博の日本館や新宿西口広場を設計しました。

現在フランス国内では、黒川紀章、丹下健三、安藤忠雄、伊藤豊雄、隈研吾など日本の建築界の巨匠たちが設計した建物を見ることができます。近年の作品では、SANAA（妹島和世と西沢立衛による建築ユニット）の設計で2012年に完成したルーブル・ランス（写真）があります。ランス（Lens）は、パリからTGVで一時間の距離にあり、かつては炭鉱で栄えた町です（注：シャンパンで有名なランス Reims とは異なります。）。閉山された炭鉱の広大な跡地が緑豊かな公園に整備され、その中にガラスとアルミニウムで作られた透明感のある巨大な箱が登場します。建物の入口前のスペースに丸く形作られたコンクリートは、日本庭園にある飛び石を思い起こさせます。ちなみに、「時のギャラリー（la Galerie du temps）」と呼ばれる常設展示スペースは、ルーブル美術館のコレクションの中から選ばれた作品が、地域を跨いで時系列に展示されており、紀元前3000年から19世紀まで一気に時空間を超えたアートの旅をすることができるのが特徴です。

（ルーブル・ランス）



ブローニュ・ビヤンクールにあるルノーの工場跡の敷地に建つ音楽複合施設「ラ・セヌ・ミュージカル」（写真）は坂茂が設計したもので、2017年にオープンしました。球体の周りには、太陽の動きに合わせて自動的に動く太陽光パネルが設置されています。二つの大きなホールを備えており、木を使った音楽ホールの天井は、日本建築の天井を見ているようです。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

(ラ・セーヌ・ミュージカル)



隈研吾によるアルベール・カール美術館（ブローニュ・ビヤンクールにあるアルベール・カール庭園内）やサン・ドニ・プレイエル駅の建設、安藤忠雄による旧商品取引所（Bourse de Commerce）をフランスの実業家フランソワ・ピノーのコレクションを展示する美術館にする改装、SANAA による旧ラ・サマリテーヌ百貨店の改装、田根剛によるコンコルド広場にある旧海軍省をカタール王族のザ・アール・サーニ・コレクションを展示する美術館にする改装など現在進行中のプロジェクトもあります。田根剛さんは、26歳の若さでエストニア国立博物館の国際コンペで優勝し、世界から注目を集めるパリ在住の若手建築家です。パリではこれまでにとらやパリ店の改装の設計を担当しました。

これまで建築に関心がなかった方も、外出規制が解除されたら、日本人建築家の作品を探しながらフランスの街を歩いてみると、街歩きが楽しくなるかもしれません。